



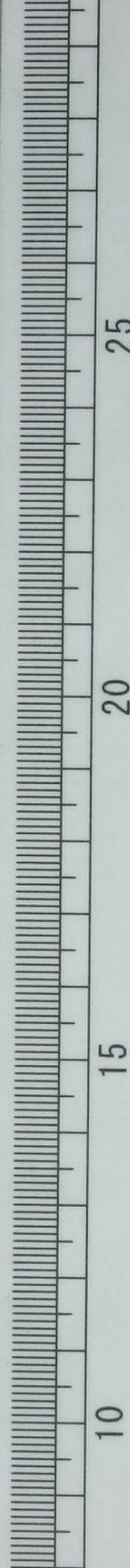
第三

鹿兒志まの
戦記

鹿兒

加々言版

篠田久太郎編



10

15

20

25

AK32
3

篠田仙果撰
永為子孫之寶

繪本 鹿兒島戰記

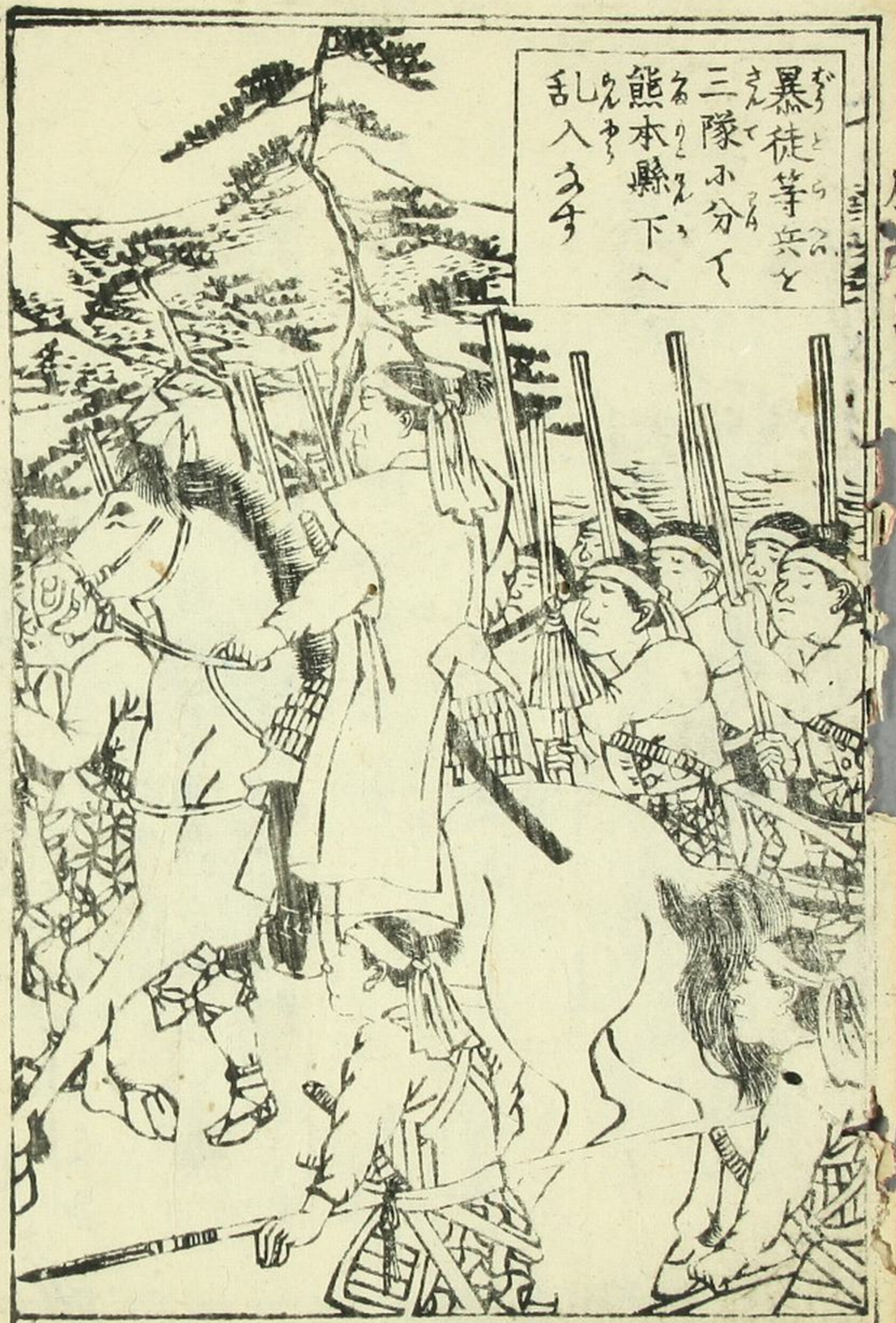
東京 青成堂發行

先般小らの書初号と編一冊加賀屋の主人が
耳垂厚く諸君の愛顧を蒙りて大吉利市の
庫入ふ次編を早くと催されクツト乗り地の筆
拍子もストン泰然と治まり
西の海其顛末を聞かすに輯録て二冊の綴書と
鹿兒島戦記の二編とあり

明治十稔
三月吉辰

笠亭主人篠田仙果





暴徒等兵と
三隊に分て
熊本縣下へ
乱入す



逆徒

三將の

壹個

桐野

利秋

篠原

國幹

司

繪本鹿島戦記二編之上

東京

篠田
仙果記

再び
暴徒
等の
まろ



手始の

戦いお懸慮を懼かさんたし敵對

せざるものこれと殺さるりまわれと
評議らに一変し準備中

整ひ

鹿島



時ハいつを
明治十年
二月八日の夜
九時五分間

始
とて向ふ



強強みれと其勢凡そ三百余
人から自慢の荒々色生徒ありと
あり案内ありこれハ縣廳附近
來るといひし
声とあり立
て縣廳のもの
たへく聞け
これハ学校生徒
の者ガ邪曲
正さん
此度美兵
拳ふる
當り

去より
降参

命
トット
と呼
トット
命

血記書



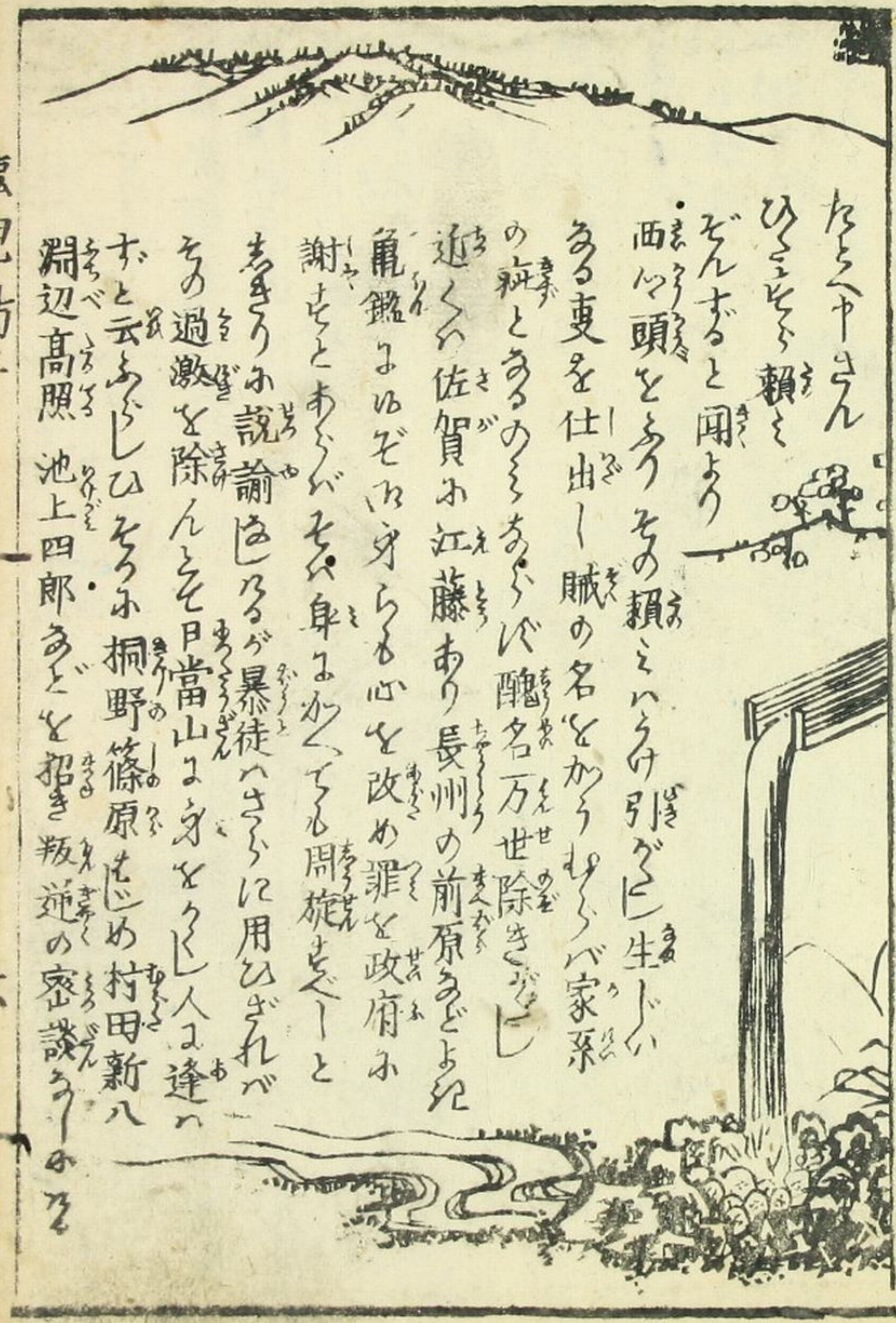
乱入せり縣廳
 直宿一人々
 加ひて生徒が
 暴たる町業を
 知る事
 撃せん
 との思ひより
 更うれば大ひに
 身支度
 とも八方より
 入るものを元より
 多分の人員に居ら

日例の暴徒に
 名田郷隆盛の
 死に到りて
 のうととを
 そろく君子
 知ろし召らん
 此度とて
 あつせ小銃
 び小弾茶を
 將應とて襲撃
 海陸ともけん
 固めを

且縣廳ハ手
 宿直の人々
 身寸鉄も帯
 故に猛り有り
 十分小防ぎ
 と思へども終
 他國より當
 久々の暴徒
 〇 説小との
 宜防ぎ戦ひ
 暴徒らあ
 此説の虚実
 縣廳焼失の
 記載せり
 備考あり



鎮臺兵む
 元師
 隊將
 憂
 小者
 下さ



たとへやさん
 ひささく頼
 ぞんぶると聞より
 西の頭をよりその頼といひ引がに生トハ
 なる変を仕出し賊の名をかきむらば家系
 の疵とあるのみあるべ醜名万世除きざし
 近々の佐賀小江藤あり長州の前原多とよ
 龍鑑よゆぞお身らも心を改め罪を政府ふ
 謝せとあるがそ身よかては周旋せしと
 考より小説諭はるが暴徒はさうに用ひざれば
 その過激を除んとそ日當山よ身をくし人よ逢ハ
 かと云ふしひそろ小桐野篠原はじめ村田新八
 淵辺高照池上四郎多とよ招き叛逆の密談ありはる



あつに三ツびりの持船なる琉球
 通ひの太平丸の彼國よりめどろの
 海路鹿島島小右やうの
 事件ありと云いさう知らぬ
 去る二月八日の正午八港
 なりて錨を投ぎし
 間もやう早船七八艘
 太平丸よりせしむる
 猛りげ小出物
 めのど凡五六十八
 各小銃鎗刀も
 得物とたぐま
 ぶやくと船中へ



西郷
 桐壺
 篠原の
 三將
 軍議を
 談す

此船へ番兵を付る間
 一切出帆ありし強て
 技錨せんともう兵力を以て
 壓すそれくと指揮の下より
 鬼と見まふ壯年と十余人舟よ
 のじその余いさく漕戻りぬ扱りのる
 変るや舟長の廣瀬其めを折々上陸

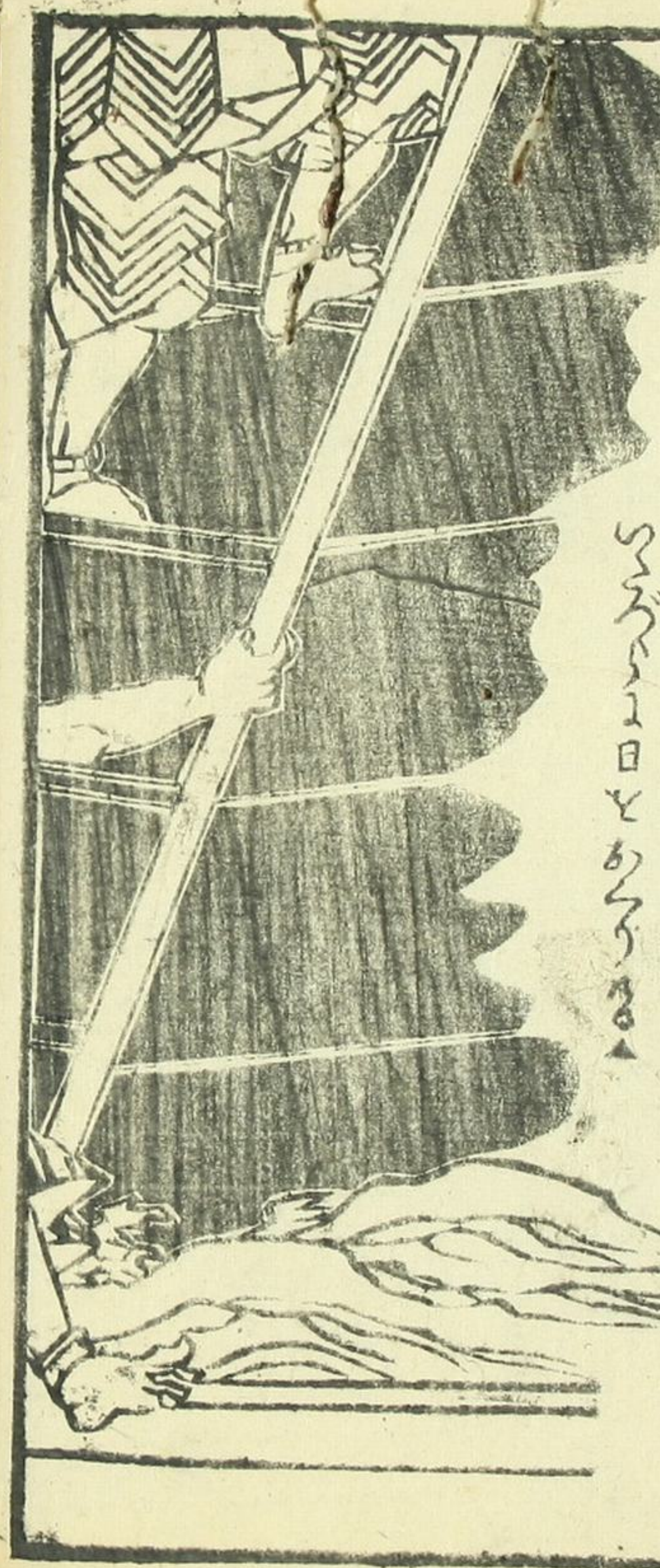


琉球
 船中
 時
 出

せしむる内務少丞木梨精一郎君との相違
居られれば何れも出帆をとらぬなるのみならず
速く出帆の相違あり取り下されしと
木梨君より鹿角島縣令大山氏へ使つて
しりしむる可否の返答さすにたす

しりしむる一日とありしなり

○生徒等
太平丸へ
乱入す



同日

十六日大山

氏より此度の

事件と認め

朝廷への届文と

木梨君と托せし

人東西より此度の

知れしを皆上陸は

られしその眼も幸う

歴史物語



太平丸錨とあげ
鹿兒島港と
出帆あり神戸へ
へ港ありよる
○大山縣令が届け
書の支意をるる
大山氏も西々らふ
加膳せしむる
ののとるゆれど
○時當山の身とむる
西々隆盛のす
鹿兒島戦記二編上



隊長多の人と招き
向ひてするに玉薬

○十分あり
兵多く集り
う拙者が
意と述べ
坐席の真中
進

010190510382

吉田家

